



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1930, 10(111): 234-234

ISSUE DATE:

1930-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161545>

RIGHT:

ある。しかし之れは非常な愚見であつて、近代の學術は個々の學者の孤立や、抜けがけの功名を許さない。是非にも、學者相互の社會的連絡によつて進まなければならないものがある。天文學は殊に此の必要が痛感せられる。望むらくは、一日も早く我が國に、かの英國のローヤル天文學會の如き、又、米國のアメリカ天文學會の如き、獨國天文ゲゼルシャフトの如きものが組織されんことを。——西洋諸國に早くより學會組織の發達してゐるのを見て、畢竟之れ外國人の社交癖の表はれのみとするは、短見者の言ひ分に過ぎない。

花 山 だ よ り

暫く御無沙汰をしてゐましたが、花山も、年初から種々面白い事があります。まづ、二月頃から、本館と子午線館の間に陸軍の二等三角點の高塔が組み上げられました。高さは17米、大ドームの上に聳えて居ます。三月末に英國からシンクロノーム會社製の最新式標準時計が到着。其の自由時計は本館地下の時計室に、又、副時計の方は子午儀室に据え付けられました。四月からは高城、宮澤、古川三君が志願助手として來られ、又、柴田氏も花山で多くの時を費されるやうになりました。目下、本館露臺と太陽館屋上に多少模様換へ工事が進行中です。之れが出来上つたら一層人々を惹きつけませう。五月から六月初まではシワスマン彗星觀測のため天文臺は異常の緊張を見せましたが、梅雨に入つて靜かになりました。超海王星は中村渡邊兩氏によつて寫眞觀測が行はれました。近いうちに海軍省から寄贈された潜望鏡が、本館の屋上に据え付けられます。之は又可なり人氣を呼ぶことになりませう。46センチ大反射鏡も愈々調節が終り、觀測に使用されるやうになりました。門には門燈が置かれ、移動觀測室の附近には見事な柵が作られました。門から玄関までの豫定道路は目下豊田君の手で作られてゐます。